

【調査資料】

平安前期の複合辞・連語機能語 (複合連語機能辞)の現代古典対照

——『竹取物語』での形態と用例——

安部清哉・菊池そのみ・江口匠・大浜弘樹

キーワード：複合辞、連語、複合機能辞、平安前期、現代語古典語対照、『竹取物語』

要旨：複合辞・連語研究の1つとして、『竹取物語』におけるいわゆる複合辞、連語、機能語などともいわれる複合表現形態（「複合連語機能辞」）を抜き出し、古文原文とその現代訳語とを対照させて分類し、古文の用例付き一覧として提示する。

1 はじめに

本稿で提示するのは、古典語と現代語とにおけるいわゆる複合辞、連語、機能語などともいわれる複合表現形態（ここでは、仮に短い略称として、以下「複合連語機能辞」と記載する）の対照事例一覧である。

古典語におけるそれらの「複合辞、連語、機能語」を、現代語と対照させつつ把握することで、従来の品詞単位での研究では遅れていたこれらの形態論的単位、語構成論的単位、語彙論的単位での形態群の共時的・通時の研究を促進するための試みであり、また、機械翻訳などの研究ヘデータを提供するためのものである。

複合連語機能辞の事例——従来の接続助詞・副助詞などの類から接続詞までを含み、さらに、「はじめとして、～ものゆえ、といえども、～たり～たり、に対して」などを対象とする。

ここではそのような試行的研究の1つとして、『竹取物語』における「複合連語機能辞」類（その一部）を、その現代語訳において該当する形態と対照させて用例と共に提示する。なお、試験的な作業手順の関係で、具体的には『竹取物語』の現代語訳における「複合連語機能辞」を選び出し、それに該当する古典原文の当該形態とを対照させる、というかたちで提示しているものである。その点では、厳密な意味・機能の現代語と古典語の対照というレベルよりは、検索・照合のための便宜的な一覧という段階であることをご了承ください。

(2)

2 「複合辞、連語、機能語」の研究

古典語と現代語との対応関係の照応、いわば、現古対照研究は、自立語レベルではいわゆる「古語辞典」や時に「現古辞典」類で明示され、容易に対応関係を確認していくことができる。また、付属語類も品詞レベルでは、同様の辞典や文法辞典、さらに文法解説書類で確認していくことができる。

しかし、そのような品詞単位を超えた形態・複合辞・連語・慣用的表現となると、一方の現代語での研究は日本語教育を中心として進展しているものの、古典語ではやや遅れて、まだ研究の途上にあるという段階である。もちろん、この15～20年ほどは、複合辞研究のようなかたちで、個別研究や網羅的な一覧の提示なども行われつつあり、徐々に進んではいるが、現代語研究に比べればまだ緒についたという段階であろう。

古典語における、いわゆる「複合辞、連語、機能語」などの類は、文法的機能としては、極めて広い領域に現れている。いわゆる、広義での助詞的なもの——格助詞、副助詞、終助詞、接続助詞的な機能——から、文節の接続（接続）部分ではたらく機能辞（複合機能辞と仮称する）、接続詞や副詞的な詞のレベルと言えるようなもの、はたまたいわゆる連語や慣用句的なものまで、さまざまな段階のものがある。

品詞単位を超えたレベルでの古典語から現代語までの通時的日本語を研究していくためには、これらの諸形態、諸形式における「複合辞、連語、機能語」即ち「複合連語機能辞」には、どのようなものがあり、どのように機能し、どのような使い分けがなされ、どのように変遷してきたか、を明らかにしていく必要がある。本稿ではそのための研究の一環として、平安前期のごく初期作品である『竹取物語』を資料として取り上げ、そこに現れている「複合連語機能辞」を現代語と対照させるかたちで把握できるようにすることを目指した。

本対照表の研究資料としての意義は、1つには、これらのような複合辞・連語機能語が通時的にどのように変遷したかを見る歴史的データになるということと、いま1つは、古典語文法と現代語文法との対照研究において、例えば、機械翻訳などで対応形態をプログラムに組み込む場合における文法・語彙のデータとして利用できること、などがあげられる。

前者について言えば、同様のデータを他作品や他の時代でも充実させていくことによって、どのような機能や意味、形態の複合辞・連語機能語が、変化が大きく、どのようなものが変化が少なく現代語まで比較的良好に継承されているか、など、文法史、語構成史、語彙史、語史研究などで利用していくことができると考える。

ここで、「複合連語機能辞」としている中には、ごく通常の助詞類、接続詞類や、辞書にも「連語」として掲載されることの少ない形式（例えば、「について」「において」等の類）から、いわゆる主に付属語である助詞を中核として名詞・動詞・助動詞などを含み込んだ連語形式での種々の表現までを広く含んでいる。それらを選択していく

基準としては、日本語教育などにおける複合辞・表現類型形式に関する複数の辞典や研究所などを参照している。

なお、『竹取物語』（以下、『竹取』と略す）を最初の資料として選択したのは、古代語でも平安前期の和文の文法を代表できる最初の資料と考えたからである。前期の『伊勢』『大和』『平中』などの和歌が多い歌物語でもなく、『篁物語』『落窪物語』『宇津保物語』などのような『源氏物語』『枕草子』などの平安後期作品に近似していく作品群でもないものとして選択した。

なお、『竹取』の本文は旧日本古典文学大系（大系本）を使用し、現代語訳の方は新編日本古典文学全集（全集本）を使用した。

3 『竹取物語』の「複合連語機能辞」の分類と抽出手順

3-1 『竹取』での分類——「A形態が現代語とほぼ同じもの」「B形態が一部同じものの」「Dその他」

今回は『竹取』の「複合連語機能辞」を、仮に以下の4分類とした。AとBとの境界線は現段階では必ずしも厳密なものではない（便宜的恣意的分類とみていただいてよい）。本稿では、紙幅の都合で、このうち、A・B・Dに分類した事例をあげる。Cは別稿を予定している。

- A 形態が現代語とほぼ同じもの（に向かつて＝に向ひて、ゆえ＝ものゆゑ、など。音便や活用などによる古語としての形態の特徴は相違としないものを含む）
- B 形態が一部同じもの（からのち＝のちに、のなら＝ならば）
- C 形態が全く異なるもの（ゆえの＝にて、をもって＝して）
- D その他（意識、補訳など、古典原文中に該当箇所がないものなど）

3-2 「複合連語機能辞」の抽出手順

本稿では、現代語の方から該当する古典語を検索することを考えて提示しているものであり、以下のような作業手順によるものである。

- 『竹取物語』（旧日本古典文学大系原文）と、その現代語と対照させるための訳として新編日本古典文学全集の訳語とを対照させる。
- 現代語訳の方にある「複合連語機能辞」類を、現代語での諸研究を参照し、特に次の文献での語形を参考にして作成された「機能語一覧表」（付記の科研費により、高橋雄一氏・須田美治氏作成）によってリストアップする。
- ◆日本語記述文法研究会編（2003-2010）『現代日本文法 1～6』くろしお出版
- リストアップした現代語での「複合連語機能辞」ごとに、現代語訳での使用箇所を2、3か所抽出する。

(4)

- その現代語訳に該当する『竹取』の原文箇所を見つけ出し、該当する古典語の「複合連語機能辞」を同定する（同じく2、3か所）。
- 現代語での「複合連語機能辞」と古典語での「複合連語機能辞」との対照見出しリストを作成する。
- 現代語と古典語とにそれぞれ当該の用例を付ける。
- 古典語の例文は、旧大系本の頁数行数を付す（例、大系P59L9.）。現代語訳部分（新編全集本が底本）に該当する旧大系本本文部分がない場合は、全集本の本文と頁数を示した。
- 古典語の用例としてわかりやすい用例、また、現代語訳での「複合連語機能辞」と形態や機能がより対応している「現代語訳—古典語用例」を1組選択する。

このようにして、提示したのが、つぎのような対照例文である。

○はじめとして＝はじめて

これを見て、使用人たちは、「やはりお悩みになることがあるにちがいない」とささやくが、親をはじめとして、だれもがその原因を知らない。

＝これを、使ふ者ども、「なを物思す事あるべし」とさゝやけど、親をはじめて、何とも知らず。大系P59L9.

実際には、他の作品と併行して行った作業の1つであって、用例も各々の機能辞ごとに数例抽出しており、また、「複合連語機能辞」も意味や機能ごとに分類されているような作業である。ここでは、本稿の形式にかかわる手順に限定して簡略に示した。

4 『竹取物語』の「複合連語機能辞」

4—1 A 連語形態が現代語とほぼ同じもの（「にに向かって＝にに向ひて」）

はじめに、古典語・現代語での形態の相違（例えば、べし）、や格助詞の有無の程度の相違はあるものの、ほぼ同形態とみなせる接続機能語を掲載する。元データでは、機能・意味による分類と順番で配列されているものであるが、紙幅の都合のため、分類番号及び名称等は略し、語形のみを見出しとして掲げ、その配列順に羅列している。

○はじめとして＝はじめて

これを見て、使用人たちは、「やはりお悩みになることがあるにちがいない」とささやくが、親をはじめとして、だれもがその原因を知らない。

＝これを、使ふ者ども、「なを物思す事あるべし」とさゝやけど、親をはじめて、何とも知らず。大系P59L9.

○かぎり（は）＝かぎり（は）

「『命がなくなればしかたがないが、生きているかぎりはこのように航海をつづけ、いつかは蓬萊（ほうらい）とかいう山に会うだろうよ』と思い、
＝命死なばいかゞはせん、生きてあらむかぎりは、かくありて、蓬萊といふらむ山に逢ふやと、大系P37L12.

○に向かつて＝に向かひて

右大臣は、「なにをおっしゃる。～～うれしいことに、よくまあ送ってきてくれたな」とおっしゃって、唐土の方に向つて、伏し拝みなさる。
＝「なに仰す。嬉しくして、おこせたるかな」とて、唐の方に向ひてふし拜み給。大系P43L2.

○ごとに＝ごとに

「大炊（おおい）寮（づかさ）の飯（めし）を炊（た）く建物の棟（むね）にある、束（つか）柱（ばしら）の穴ごとに、燕は巢を作っております。
＝「大炊寮の飯炊く屋の棟に、つくの穴ごとに、燕は巢をくひ侍る。大系P50L5.

○まで＝まで

「この連中が帰るまで、私は斎戒沐浴（さいかいもくよく）していよう。この玉を取ることができなければ、家に帰ってくるな」
＝「この人々ども歸るまで、いもゐをして、吾はをらん。この玉取りえでは、家に歸り來な」。大系P46L1.

○のち＝のち

そののち、翁（おきな）と嫗（おうな）は血の涙を流して思い乱れるけれども、どうにもしかたがない。
＝その後、翁・女、血の涙を流して、惑へどかひなし。大系P66L7

○ゆえ（に）＝ものゆゑ

「……」と、事が事で、簡単に運ばぬゆえに、大納言（だいなごん）をそしりあっている。
＝仰給ふことゝ、事ゆかぬ物ゆゑ、大納言をそしりあひたり。大系P46L6.

○ば＝ば（ならば＝ならば）

火鼠の皮衣（かわぎぬ）は、この唐土の国にない品物です。噂（うわさ）には聞いて

(6)

いますが、まだ見たことのない物です。しかしおっしゃるように、この世に存在する物であるならば、天竺（てんじく）の人たちがこの国に持って参るでしょう。

=「火鼠の皮衣、此國になき物也。をとには聞ども、いまだ見ぬなり。世にあるものならば、この國にももてまうで來なまし。P42L5.

○というが=といへども

「私も、心ならずも、このように行ってしまうのですから、せめて昇天するのを見送ってください」と言うが、翁は、「なんのためにお見送り申しあげるのですか、——」と、

=かぐや姫、「こゝに心にもあらでかく罷るに、昇らんをだに見をくり給へ」と言へども、「なにしに、悲しきに、見をくりたてまつらん。——」と、大系P64L9.

○といっても=といふとも

かぐや姫の言うことには、「どうしてまた、結婚などをするのでしょうか」と言うと、翁は「変化の人といっても、あなたは女の身を持っていられっしゃる。もつとも、このじじいのいる間は独身のままでいられっしゃれましようよ。

=かぐや姫のいはく「なむでうさることかし侍らん」と言へば「變化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし。大系P32L5.

○がたい=がた

「ああ、その李は食べがたい」と言ったことから、

=「あなたへがた」と言ひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、あなたへがたとは言ひはじめける。大系P49L11.

○によって=によりて

天人の王の言うには、「汝（なんじ）、未熟者よ。わずかばかりの善行を、おまえがなしたことによって、おまえの助けにしようと、ほんのわずかな間だと思って、かぐや姫を下界にくだしたのだが、長い年月の間、たくさんの黄金（こがね）を賜って、おまえは生れかわったように金持になった。——」。

=いはく、「汝、おさなき人、いさゝかなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどゝて下しゝを、そこらの年頃、そこらの金給て、身をかへたるごと成にたり。——」大系P63L12

○たら=たらば

「燕（つばめ）が、巢を作つたら知らせよ」とおっしゃるのを、うけたまわって、

=「燕の巢くひたらば、告げよ」とのたまふを、うけたまはりて、大系P49L16.

○幸いに=幸いに

幸いに神の助けがあるならば、

=もし幸に神の救あらば、大系P47L9.

○によって=によりてなむ

(なむ、は、強調の添加とし、類似とみる)「——私の身は、この人間世界のもので
はございません。月の都の人なのです。それなのに、前世(ぜんせ)の宿縁によって、
この世界に参上していたのでございます。」

=「をのが身はこの國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契ありけるにより
なん、この世界にはまうで來りける。」大系P59L15.

○べきではない=べからず

この皇子は、「いまとなつてまで、あれこれ言うべきではない」と言うとともに、縁
側に這(は)いのほりなさつた。

=この皇子「いまさへ何かと言ふべからず」と言ふまゝに、縁にはひ上り給ぬ。大系
P37L2.

○べきだ=べけれ。

「主君に派遣されている者は、命を捨ててでも、みずからの主君の命令をかなえよう
と思うべきだ。この日本にない物ではない、まして天竺(てんじく)や唐土(もろこ
し)の物でもない。」

=「てんの使といはんものは、命を捨てゝも、をのが君の仰ごとをば叶へんところ思ふ
べけれ。この國になき、天竺・唐の物にもあらず。」大系P45L9

○ことは=ことも

思い悩むことは何もございません。ただなんとなく心細く思うだけです」と言うの
で、

=思ふこともなし。物なん心ほそくおぼゆる」と言へば、大系P59L4

以上、接続形態が、古典語・現代語での形態の相違(例えば、べし)や、格助詞、係
助詞の有無の程度の相違はあるものの、ほぼ同形態とみなせるものである。

(8)

4—2 B 形態が類似・近似するもの、あるいは、一部同じもの（例、からのち＝のちに）

○を～として＝を～と

「私が、この人間の国に生れたというのであれば、ご両親様を嘆かせ奉らぬ時まで、ずっとお仕えすることもできます。ほんとうに去って別れてしまうことは、かえすがえすも不本意に思われます。脱いでおく私の着物を形見としていつまでもご覧ください。」

＝「此國にむまれぬとならば、なげかせたてまつらぬほどまで侍らで過ぎ別ぬる事、返々本意なくこそおぼえ侍れ。脱ぎをく衣を形見と見給へ。」大系P64L14

○において＝には

「わずかな間だと申して、あの月の国からやって参りましたが、このようにこの国において多くの年を経てしまったのでございます。あの月の国の父母のこともおぼえておりません。」

＝「かた時の間とて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國にはあまたの年をへぬるになん有ける。かの國の父母の事も覺えず、こゝには、かく久しく遊びきこえて、ならひたてまつれり。」大系P60L7.

○においては＝に

「とにかく、まず大臣を招き入れてさしあげましょう。この世においては見ることができぬ皮衣のようですから、これを本物だと思いなされ。」

＝「とまれかくまれ、請じ入たてまつらむ。世中に見えぬ皮衣のさまなれば、これをと思ひ給ね。」と言ひて、呼びすへたてまつれり。大系P43L14.

○においても＝にも

何世代も生き、年老いたこの竹取ですが、竹を取る野山での生活においても、こんなに苦しい目ばかりを見たことはございませんよ。

＝くれ竹のよゝの竹とり野山にもさはわびしきふしをのみ見し（大系頁不明 新全集P33）

○に対して＝に

①このようにしてかぐや姫を見せた造（みやつこ）麿（まろ）を、帝は嘉（よみ）しなさる。また、翁（おきな）のほうも御供（とも）として仕えている文武百官の人に対して盛大に饗応（きようおう）する。

=かく見せつるみやつこまろを、よろこびたまふ。さて、仕うまつる百官の人に饗いかめしう仕うまつる。新全集P62.

(大系本：かく見せつる宮つこまろを喜び給。さて仕うまつる百官の人々、あるじいかめしう仕うまつる。大系P57L8.)

②御輿（おんこし）にお乗りあそばしてからのちに、かぐや姫に対して歌をお詠みになられる、

=御輿にたてまつりて後に、かぐや姫に、(歌) 大系P57L11.

○にむかって=に

かぐや姫に向って、姫が、「はやく、あの御使者（ごししや）にお会いしなさい」と言う、かぐや姫は、「私はすぐれた容貌などではございません。どうして勅使（ちよくし）に見ていただけでしょうか」と言うので、姫は、「困ったことをおっしゃるね。帝の御使い を、どうしておろそかにできましょうか」

=かぐや姫に、「はや、かの御使に對面し給へ」と言へば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」と言へば、「うたてもの給ふかな。御門の御使をばいかでかおろかにせむ」大系P54L7.

○のち=のちなむ

また翁が「じじいは、もう七十歳をこえてしまった。命のほどは今日（きょう）とも明日（あす）ともわからない。この世の中の人、男は女と結婚する。また女は男と結婚する。そうしたのちに一門が繁栄するのです。

=「翁、年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人、おとこは女にあふことをす、女は男にあふ事をす。その後なむ門ひろくもなり侍る。いかでか、さることなくてははせん」。大系P32L3.

○からのちに=のちに

竹取の翁（おきな）が、竹を取るとき、この子を見つけてからのちに竹を取ると、節（ふし）の両側にある空洞の一つ一つに、黄金（こがね）が入った竹を見つけることがたび重なった。

=竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹とるに、節を隔てゝよごとに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。大系P29L12.

○ても=て

皇子が答えておっしゃるには、「——『自分の思うことが成就できないで、世の中に生きていてもしかたがない』と思ったので、」

(10)

=「『思ふこと成らでは世中に生きてなにかせん、と思ひしかば、』」大系P37L10.

○のために=に

迎えのために人がたくさん参上している。

=迎へに人多くまゐりたり。大系P36L4.

○として・としては=と

①このことを、このごろになって考えてみますと、御側室（ごそくしつ）としていらっしゃるはずのかぐや姫が必要となさっているのだったよと承知いたしまして。

=これを此頃按ずるに、御つかひとおはしますべきかぐや姫の要じ給べきなりけり、とうけたまはりて、此宮より給はらん」大系P40L5.

②「おまえたちは、主君の家来として、世間に知られている。その主君の命令に、どうしてそむけようか」とおっしゃって、

=「なむちらが君の使と名を流しつ。君の仰ごとをば、いかゞ背くべき」との給て、大系P45L13.

○もしないで=も〜で

かぐや姫の言うには、「大きな声でおっしゃいますな。建物の上にいる人々が聞くと、たいそうみつともないことですよ。あなた様方のこれまでのご愛情をわきまえもしないで、出ていってしまうことが残念でございます。」

=かぐや姫はいく、「こは高になのたまひそ。屋の上ををる人どもの聞くに、いとまきなし。いますかりつる心ざし思ひも知らで、罷りなむずる事の口惜しう侍けり。——」大系P62L8.

○ことだ=ことなり（事也）

かぐや姫は、天上で罪をなされたので、このように賤（いや）しいおまえの所に、しばらくいらっしゃったのである。今、罪障（ざいしょう）消滅したので、このように迎えるのだが、翁（おきな）は泣いて嘆く。泣くにあたわぬことだ。はやくお返し申しあげよ」と言う。

=かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきをのれがもとに、しばしおはしつる也。罪の限果てぬればかく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬ事也。はや出したてまつれ」と言ふ。大系P63L16.

○ただ〜ばかり=ただ〜に〜て

そのなかで、氣丈夫（きじょうぶ）な者が、むりにこらえて矢を射ようとするが、矢

は目標からはずれて、あらぬ方（かた）へ行ったので、荒々しく戦うこともなく、気持がぼんやりとして、ただお互いに顔を見合わせるばかりであった。

=中に心さかしき者、念じて射んとすれども、外ざまへ行きければ、あれも戦はで、心地たゞ痴れに痴れて、まもり合へり。大系P63L8.

○ことは=ことも

思い悩むことは何もございません。ただなんとなく心細く思うだけです」と言うので、

=思ふこともなし。物なん心ほそくおぼゆる」と言へば、大系P59L4

○にもかかわらず=に

「——五穀（ごこく）を断（た）って、千余日の間に努力いたしましたこと、なみたいていではありません。それにもかかわらず、報奨をまだいただいております。これをいただいて、貧しい弟子にいただかせたいのです」

=「——五穀断ちて、千餘日に力を盡したること少なからず。しかるに祿いまだ給はらず。これを給てけこに給せん」 大系P39L15

○の=に

派遣した家来は、大納言が夜も昼も待っていらっしゃるのに、年を越すまで連絡してこない。

=遣はしし人は、夜晝待ち給に、年越ゆるまでをともせず。大系P46L12

○ことなく=なく

あなたは『この世にまたとない物で、くらべようがないから、それを疑うことなく本物だと思おう』とおっしゃる。

=世になき物なれば、それをまことと疑ひなく思はん、とのたまふ。猶これを焼きて心みん」と言ふ。 大系P44L4.

○のなら=ならば

「——船が帰るとき、その船に託してお送りください。万一、お金がいただけないのなら、あの代物（しろもの）の皮衣を、返してください。」

=「——舟の歸らむにつけてたび送れ。もし金給はぬならば、かの衣の質返したべ」、大系P42L15.

○てから=て

(12)

竹取の翁（おきな）が、竹を取るとき、この子を見つけてからのちに竹を取ると、節（ふし）の両側にある空洞の一つ一つに、黄金（こがね）が入った竹を見つけることがたび重なった。

= 竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹とるに、節を隔て、よごとに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。大系P29L11.

○とは=とも

玉の枝はもちろん、この歌をも、心を打つ歌とは思わないでいると、竹取の翁が姫の部屋に走って入ってきて、言うには、

= これをあはれとも見でをるに、竹取の翁はしり入りていはく、（大系頁不明、新全集P29）

○ても=とも

「——このように鍵（かぎ）をしめて閉じこめていても、あの月の国の人が来たなら、みなしぜんに開いてしまうでしょう。」

= 「——かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、みな開きなむとす。」大系P62L2.

○によって=になむ

姫も、『ごもつともです。五人の方々はどなたも優劣がつけがたくていらっしゃるので、私の見たいものさえご用意くださればご愛情のほどがはっきりするでしょう。お仕えすることは、その結果によって決めましょう』と言うので、

= 「いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしの程は見ゆべし。仕ふまつらん事は、それになむ定むべき」と言へば。大系P33L7.

○とか=と

①「火鼠（ひねずみ）の皮とかいう物が、そちらにはあるらしいが、買って届けてくれ」と書いて、

= 火鼠の皮といふなる物買ひておこせよとて、大系P41L14.

②『——生きているかぎりはこのように航海をつづけ、いつかは蓬萊（ほうらい）とかいう山に会うだろうよ』と思い、

= 生きてあらむかぎりは、かくありて、蓬萊といふらむ山に逢ふやと、大系P37L12

○たとえ〜ても=とも

家来たちが申しあげるには、「そのご命令とあらば、どうしてもございませぬ。たとえ困難であっても、ご命令に従って、さがし求めに行きましょう」と申しあげると、

=「さらばいかゞはせむ。難き事なりとも、仰ごとに従ひて求めにまからむ」と申に、大系P45L12.

○によって=に

あの子はこの造麿（みやつこまろ）の手によって産ませた子ではありません。じつは、昔、山で見つけた子なのです。

=宮つこまろが手に生ませたる子にもあらず。昔、山にて見つけたる。（大系頁不明、新全集P60.）

4-3 D 意識、補訳。古典原文中に該当箇所がないものなど。

これらの場合は、現代語での形態を見出しとして、当該の古典の箇所の例文相当箇所を挙げておく。現代語には訳しにくい形態である場合、現代語での表現ではまったく異なるかたちを取るような場合（Cにも近い）などが含まれている。古典語側から、あるいは、現代語側から逐語的には訳しにくい形態・表現を見つけ出す上で参考になる事例ということができようか。

○ことに=（形容詞連用形での接続）

姫は、内侍のいる所に帰ってきて、「残念なことに、この小さい娘は、強情者（ごうじょうもの）でございまして、お会いしそうにもございせん」と申しあげる。

=内侍のもとに歸り出て、「くちおしく、このおさなきものは、こはくはべるものにて、對面すまじき」と申。大系P54L11.

○なんか（などを）=（か）

「どうしてまた、結婚などをするのでしょうか」と言うと、

=かぐや姫のいはく「なむでうさることかし侍らん」と言へば、全集P22.

○たり～たり=（動詞連用形+動詞連用形）

姫の家へ行って、たたずんだり歩きまわったりするのだが、

=かの家に行きてたゝずみありきけれど、かひあるべくもあらず。文を書きてやれど、返事せず。大系P31L6.

○たり～たり=（動詞連用形+動詞連用形）

誓願の詞（ことば）を放って、立ったり、すわったり、泣きながら神様に呼びかけなさることを、千度ほども申しあげなされた効果があったのだろうか、

=いまより後は、毛の末一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よ事をはなちて起ち居、

(14)

泣々よばひ給事、千度ばかり申給ふけにやあらん大系P48L2.

○はもちろん＝（前文脈と対比させた補訳部分）

玉の枝はもちろん、この歌をも、心を打つ歌とは思わないでいると、竹取の翁が姫の部屋に走って入ってきて、言うには、

＝（前文脈）これをあはれとも見でをるに、竹取の翁はしり入りていはく、全集P47

○に対する＝（意識部分）

かぐや姫は、「死ぬなどというのは、やはり嘘（うそ）だろうと、いちおう私に宮仕えをさせなさって、死なないでいるかどうか、ご覧なさい。たくさんの人たちの私に対する愛情がなみたいでなかったのを、すべてむだにしてしまったのですよ。」

＝「猶そら事かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ。あまたの人の、心ざしおろかならざりしを、空しくしなして、しこそあれ。」大系P56L2.

○に対する＝の

前世（ぜんせ）からの宿縁がなかったために、このようにまもなく出ていかなければならぬのだと思い、悲しゅうございます。両親に対するお世話を、すこしもいたしませぬまま出かけてしまう道中であってみれば、当然安らかではありますまいから、

＝いますかりつる心ざし思ひも知らで、罷りなむずる事の口惜しう侍けり。長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめり思ふが、悲しく侍る也。親達の顧をいさゝかだに仕うまつらで、まからむ道も安くもあるまじき。大系P62L10.

○をこめて（意識部分）

お召しには応じなかったとはいえ、ご返事はさすがに情をこめてやりとりなさって、趣深く、季節ごとの木や草につけたりして、帝は歌を詠んでおつかわしになる。

＝御返りさすがに憎からず聞え交し給て、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす。大系P58L6.

○もかまわず＝【もかくさず】＝（もつゝみ給はず）

八月十五日も近いころの月になって、縁側に出てすわり、かぐや姫は、たいそうひどくお泣きになる。いまはもう、人目もかまわずお泣きになる。

＝八月十五日ばかりの月に出で居て、かぐや姫いといたく泣き給。人目もいまはつゝみ給はず泣き給。大系P59L11.

○ほど＝（意識部分）

また翁が「じじいは、もう七十歳をこえてしまった。命のほどは今日（きょう）とも明日（あす）ともわからない。この世の中の人、男は女と結婚する。

=「翁、年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人、おとこは女にあふことをす、女は男にあふ事をす。」大系P32L2.

○ほど＝（意識部分）

五人の方々はどうなとも優劣がつけがたくていらっしゃるので、私の見たいものさえご用意くださればご愛情のほどがはっきりするでしょう。お仕えることは、その結果によって決めましょう』

=いかでか、中に劣り優りは知らむ。五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらんに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらんと、そのおはすらん人々に申給へ」大系P32L15.

○つつ＝（動詞連用形）

ふつうの人が問題にもしないような場所にまで心を惑（まど）わしつつ行ってみるが、何のききめもありそうに見えない。

=人の物ともせぬ所にまどひありけども、なにの驗あるべくも見えず。全集P20

○につき＝（補訳部分、「ことにつき」＝「こと」）

私が強情にご命令に従わなかったことにつき、無礼な奴（やつ）めとお心におとどめなさっていることが、今も心残りになっております。

=心強くうけたまはらずなりにし事、なめげなる物に思しめし止められぬるなん、心にとゞまり侍りぬる」大系P65L13.

○さえ～ば＝（意識部分）

姫も、『～五人の方々はどうなとも優劣がつけがたくていらっしゃるので、私の見たいものさえご用意くださればご愛情のほどがはっきりするでしょう。お仕えることは、その結果によって決めましょう』と言うので、

=「いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしの程は見ゆべし。仕ふまつらん事は、それになむ定むべき」と言へば。大系P32L15.

○とはいえ＝（意識部分）

かぐや姫の御（おん）もとだけに御文を書いてお送りになる。お召しには応じなかつたとはいえ、ご返事はさすがに情をこめてやりとりなさって、趣深く、季節ごとの木や草につけたりして、帝は歌を詠んでおつかわしになる。

=かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給。御返りさすがに憎からず聞え交し給

(16)

て、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす。大系P58L5.

○にしても = (意識部分)

としるしてあるのを見て、右大臣は、「なにをおっしゃる。あと、わずかな金のことだよ。それにしても、うれしいことに、よくまあ送ってきてくれたな」とおっしゃって、

=.と言へることを見て、「なに仰す。いま金すこしに（こそあなれ。かならずをくるべき物に）こそあなれ。嬉しくて、おこせたるかな」とて、大系P43L1.

○ように = (意識部分)

海上に、かすかに山が見えます。船の楫（かじ）を鳥に近づけるように操作して、それを見る。海上にただよっているその山はたいそう大きい。

=海〈漚うみ〉)の中に、はつかに山見ゆ。舟のうちをなむせめて見る。海の上にたゞよへる山、いと大きにてあり。大系P38L5.

○によって = (「さて」、意識部分)

このような事件によって、かぐや姫の容貌（ようぼう）の、世に類（たぐい）なく美しいことを、帝（みかど）がお聞きあそばされて、

=さて、かぐや姫、かたちの世に似ずめでたきことを、御門きこしめして、大系P53L14.

○とおりに = (意識部分) —— (「思うとおりに」 = 「心にも」)

「私がつくった子でないのだから、思うとおりににはならないでおります」と言って、そのまま月日を過ごしている。

=「をのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日すぐす。大系P31L9.

○ように = (補訳箇所)

かぐや姫が半信半疑で見ると、その鉢の中に手紙がある。広げて見ると、つぎのようにある。

=かぐや姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、(文の内容) 大系P34L13.

○にちなんで = (補訳箇所)

これを聞いてから、遂行できなくてがっかりというような場合を、「阿倍」にちなん

で、「あえ（へ）なし」と言うようになったのである。

=これを聞きてぞ、とげなき物をば、あへなしと言ひける。大系P45L1.

○ようがない＝（補訳箇所）

あなたは『この世にまたとない物で、くらべようがないから、それを疑うことなく本物だと思おう』とおっしゃる。

=「世になき物なれば、それをまことと疑ひなく思はん、とのたまふ。猶これを焼きて心みん」と言ふ。大系P44L5.

（○する（漢語サ変動詞）＝該当せず）

①このとき、三日間というのは、命名式を祝って、声をあげて歌をうたい、管絃（かんげん）を奏する。

=この程三日うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。おとこはうけきはらず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。大系P30L5.

②この内侍（ないし）は、内裏（だいら）へ帰参して、このようすを奏上する。

=此内侍歸り、このよしを奏す。大系P55L2.

○のだ＝（意訳箇所）

皇子は、「しごくこっそりと行くのだ」とおっしゃって、供人（ともびと）も多くは連れていらっしやらない。

=皇子、「いと忍びて」とのたまはせて、人もあまた率ておはしませず。大系p35L11.

○ようがない＝（意訳箇所＝慣用句：「たとえようもない」＝「物にも似ず」）

地上から五尺ほども上に立っている人たちは、その衣装のすばらしいこと、たとえようもない。飛ぶ車を一つともなっている。

=立てる人どもは、装束の清らなること、物にも似ず。飛車一具したり。全集P71

○さえ＝（意訳箇所、あるいは「を」）（「をさえ」の意とみれば＝「を」の強調として現れると解釈できる）

五人の方々はどうなとも優劣がつけがたくていらっしやるので、私の見たいものさえご用意くださればご愛情のほどがはっきりするでしょう。お仕えすることは、その結果によって決めましょう』

=いかでか、中に劣り優りは知らむ。五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらんに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらんと、そのおはすらん人々に申給へ」大系P32L15.

(18)

○やいなや＝（動詞連体形。動詞連体形が動詞に連続する場合の意味合い）

かひはかく……（貝はなかったけれども、あなたにお手紙をいただいて、甲斐はこのように、まさしくありましたよ。この「甲斐（かい）」ならぬ「匙（かい）」によって、苦しみがきわまって死ぬ私の命をすくってくださらないのですか）と書き終るやいなや、絶命してしまわれた。

＝かひはく有ける物をわびはてゝしぬる命をすくひやはせぬと書きはつる、絶え入給ひぬ。大系P53L10.

使用資料

○古文原文：旧日本古典文学大系

○現代語訳：新編日本古典文学全集。

付記

①本稿は、次の研究費による研究成果の一部である。

○2016年度日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）（課題番号：26370550、代表：鈴木泰）

②本稿は、上記の研究過程で『竹取物語』『夜半の寝覚』の用例収集と分類とを行った基礎データの一部である。特に『竹取』での抽出分類作業にあたった菊池そのみ（学習院大学学部生、筑波大学大学院博士前期進学予定）、と基礎作業に協力した江口匠（学習院大学大学院）・大浜弘樹（学習院大学学部生）を連名とした。